国立特別支援教育総合研究所 研究紀要 36 : 55-76 March 2009

調査資料

「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査

―幼稚園・保育所への機関支援で踏まえるべき視点の提言―

久保山 茂 樹[1] ・ 齊 藤 由美子[2] ・ 西 牧 謙 吾[3]
當 島 茂 登[4] ・ 藤 井 茂 樹[5] ・ 滝 川 国 芳[2]

[1]企画部, [2]教育研修情報部, [3]教育支援部
[4]鎌倉女子大学, [5]教育相談部

要旨：幼稚園・保育所の保育者は「気になる子ども」という言葉で，保育上何らかの課題がある子どもを表現することがある。本論文では，保育者にとって「気になる子ども」とはどのようなものかをアンケート調査によって資料を得た。その結果，発達障害が想定されるものから，被虐待やアレルギーまで多岐にわたる回答が得られた。また「気になる子ども」がいる場合の保育上の課題や現在行っている支援の実際について調査したところ，「気になる子どもの行動面の課題」「集団活動における課題」について多く回答され，支援の実際としては「個別のかかわり・声かけ」が半数以上を占めた。続いて「気になる保護者」について尋ねたところ，回答は「しつけ」「無関心」「園の意図が伝わらない」など多岐にわたる回答が得られた。すべてのアンケート項目で，回答者の所属機関や受け持つ学級の学年により，回答傾向に差異が見られた。結果を踏まえ，幼稚園，保育所等へ機関支援を行う者が留意すべき点について検討した。
見出し語：特別な支援，気になる子ども，気になる保護者，保育者の視点

Ⅰ 問題と目的

特別支援教育の進展により，幼稚園に特別支援教育コーディネーターが指名されるなど（2007年度，「指名予定」を含め公立幼稚園の57.3％。文部科学省：2008a)[12] 支援体制が整備されつつある。また2008年に示された幼稚園教育要領[13] には「特別支援学校などの助言又は援助を活用」することや「医療，福祉などの業務を行う関係機関と連携」することが明記された。同様に2008年に示された保育所保育指針[8] にも障害のある子どもの保育について「専門機関と連携を図り，必要に応じて助言等を得ること」とある。このような状況の中，筆者らのような特別支援教育の研究者や特別支援学校地域支援部の相談担当者等が幼稚園，保育所に対し機関支援[注1] を行う機会（笹森・澤田・廣瀬ら，2008[19]）が増えてきている。

特別支援学校の相談担当者や研究者等が行う機関支援では，あらかじめ決められた対象児（多くの場合は何らかの診断名がついている）を中心に保育者と協議を行うが，保育者から「実は他にも『気になる子ども』がいるのです」などと申し出を受けることが多い。その結果，本来の対象児よりも「気になる子ども」の相談の方が長くなることも珍しくない。

注1） 本論文では，「機関支援」を，幼稚園，保育所等の機関からの求めに応じて，相談したり，助言をしたり，情報提供することとする。

幼稚園や保育所の保育者が「気になる子ども」ということばを使うのは，子どもが乳幼児であるため，障害があるかもしれないが診断がついていない場合や，子どもが示す気になる行動が障害によるものか，環境の為なのかがわかりにくい場合が多いからである。当然「気になる」という言葉で表現される内容は保育者によって異なる。したがって，幼稚園，保育所に対する機関支援を行う者は，保育者たちが「気になる子ども」という言葉をどのように使っているのか，理解し，幅広く対応できる準備をしておかなければならない。

「気になる子ども」については，本郷らの一連の研究（本郷・飯島・平川ら，2005[4]；飯島・本郷・杉村ら，2007[6]）がある。本郷・澤江・鈴木ら（2003）[5]は子どもに関する７領域92項目のチェックリストをあらかじめ用意し，保育者に１人の子どもを思い浮かばせて記入してもらう方法をとった。その際，診断があり，障害児として在籍している子どもは除かれている。この方法ではチェックリストを用いているため数値処理は容易であるが，保育者の実感や保育者が日常使用する子どもを表す言葉とは乖離している可能性がある。また，記入者は全て公立保育所の保育者であり，幼稚園や私立保育所の保育者のデータは得られていない。

また，楠（2005）[11]は「気になる子ども」，田中（2004）[22]や無藤・神長・柘植ら（2005）[14]は「気になる子」，別府（2006）[1]は「ちょっと気になる子ども」という言葉を用いて，それぞれが出会った子どもの実態や支援内容を整理している。いずれも著者自身がかかわるか，保育現場での実践に基づいて検討されたものであり，機関支援を行う者にとって貴重な資料である。しかし，保育者が「気になる子ども」をどのように捉えているかは明らかになっていない。

一方，「気になる子ども」と共に保護者とのかかわりに課題を感じている保育者は多い。小野田（2005）[17]によれば，「あなたは保護者対応の難しさを常日頃感じておられますか？」という問いに対し，幼稚園教諭の42％が「大いに難しさを感じる」，50％が「少し難しさを感じる」と回答している。実際に筆者らが行った幼稚園，保育所への機関支援でも，子どもの実態や保育内容と並んで保護者とのかかわりが課題にあげられることが多い。機関支援を行う者は，保育者が保護者とのかかわりで，どのような課題を持っているかを把握しておく必要がある。

さらに，幼稚園と保育所との差異にも着目しておく必要がある。幼児が日々通う機関として幼稚園と保育所は，類似している部分があるが，主として３歳児以上を対象とし両親の就労等，保育に欠ける状況を問わない幼稚園と，０歳児から保育し，保育に欠ける状況が必要な保育所とでは，子どもや保護者の実態や保育者の視点が異なるものと推測される。同時に公立と私立の差異についても検討が必要であろう。

そこで，本研究では，幼稚園，保育所の保育者に対しアンケート調査を実施することで，特別支援学校の相談担当者や研究者等が幼稚園，保育所へ機関支援を行う際に留意すべき事項を検討することを目的とした。

調査から得られた資料を基に，保育者が「気になる子ども」をどのように捉え，保育上どのような課題を持ち，保育上どのような試みを行っているかを明らかにし（Ⅳ．結果２で述べる），保育者が「気になる保護者」をどう捉え，保護者からどのような質問を受けているかを明らかにし（Ⅴ．結果３で述べる），保育者が障害に関する専門機関に期待する事柄を明らかに（Ⅵ．結果４で述べる）する。

Ⅱ 方 法

１．調査対象

本研究では，公立幼稚園，公立保育所，私立幼稚園，私立保育所の４種類の機関が全て設置され，保育者も多数存在するＡ市で調査を実施した。Ａ市は人口40万人台の中核市で療育センターと市立特別支援学校を２校設置している。また，市内には県立の特別支援学校も１校設置されている。

調査対象はＡ市内の全幼稚園（39園）と全保育所（認可保育所のみ39か所）に勤務する全幼稚園教諭及び保育士とした。なお，幼稚園のうち公立幼稚園の回答者は，ごく少数であり，回答者が特定できる

表１　調査項目

1．回答者の属性
（1）勤務する幼稚園・保育所
（2）経験年数
（3）年齢
（4）勤務形態
（5）担任クラス（学年）と障害児の有無
（6）障害児保育の経験

2．「気になる子ども」について
（1）「気になる子ども」とは
（2）「気になる子ども」がいる場合の保育上課題
（3）「気になる子ども」への試み
（4）「気になる子ども」の保護者とのかかわりの課題
（5）「気になる子ども」の保育にあたって、園にあれば良いと思うもの

3．保護者について
（1）保護者から受ける相談
（2）「気になる保護者」とは

4．専門機関などへの期待すること

5．保育について困ったことがあるときの相談相手

6．受けたい研修はどのような内容か

可能性があるため，公立・私立の区別をせず一括して「幼稚園」とした。保育所については「公立保育所」と「私立保育所」とに分類して整理した。

2．手続き

調査は幼稚園教諭及び保育士に対する質問紙法によって実施した。2006年11月上旬にA市内の全幼稚園長及び全保育所長に対して，所属の全幼稚園教諭及び全保育士分の調査用紙を一括して送付した。園長及び所長には調査用紙の配布と回収及び一括返送を依頼した。調査用紙返送の締め切りは2006年11月20日とした。

調査項目は一部を除き自由記述とした。自由記述の分析にあたっては，それぞれの設問につき２名の研究分担者が記述された内容をカテゴリー化したのち，比較検討と修正を行った。さらに全研究分担者で（６名）で検討し，カテゴリーを確定した。

3．調査項目

調査用紙はＡ４版２ページで，調査項目は表１に示したとおりであった。このうち，本稿では「回答者の属性」（調査項目１），「気になる子どもについて」（調査項目２の（１）（２）（３）），「保護者について」（調査項目３）及び「専門機関などへの期待すること」（調査項目４）について検討する。

Ⅲ　結果１．回答者の属性等

1．回収状況

幼稚園20園（回収率51.3％），公立保育所12園（同100％），私立保育所20園（同74.1％）から回答があった（表２）。全体としてＡ市にある幼稚園・保育所の66.7％から回答があり，585名の幼稚園教諭及び保育士から回答があった。なお，調査用紙は全保育者に配付するように依頼したが，実際には幼稚園，保育所によって配付方法が異なったため調査用紙配布数が正確に把握できていない。そのため保育者については回収率を求めていない。

以下，回答のあった585名についてその属性等を述べる。

2．学級担任等

調査時点で学級担任をしているか否かについて尋ね，学級担任をしている場合は，どの学年かを尋ねた（０歳児，１歳児，２歳児は「未満児」として一括した）。また，担任をしていない場合，「主任」「フリー」「障害児担当」のいずれかを選択するよう求めた。

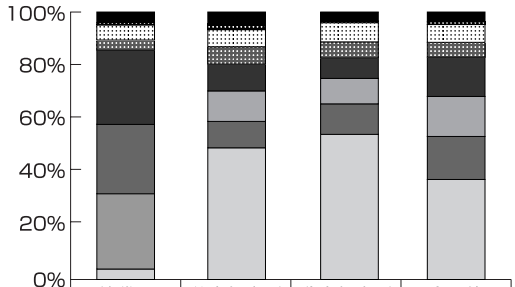
以上の結果を所属機関ごとに集計した結果を図１に示した。３歳児，４歳児，５歳児の担任の割合はほぼ均等であったが，保育所２群については未満児の割合が高かった。

3．障害児保育の経験

障害のある子どもの保育について「幼稚園・保育

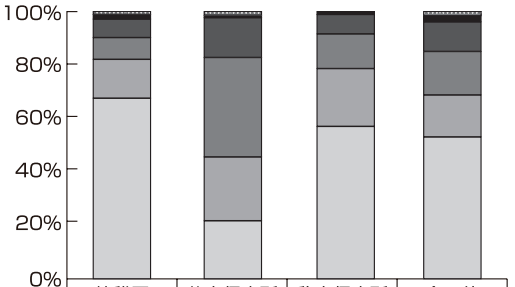
表２　回収率等

	配布数	回収数	回収率	幼稚園教諭・保育士の回答数
幼　稚　園	39	20	51.3%	187
市立保育所	12	12	100.0%	130
私立保育所	27	20	74.1%	268
全　　体	78	52	66.7%	585



	幼稚園	公立保育所	私立保育所	全　体
無記入	6	5	7	18
障害児担当	2	3	2	7
フリー	10	8	20	38
主任	8	9	16	33
5歳児	52	13	21	86
4歳児	49	15	25	89
3歳児	53	13	31	97
未満児	7	64	146	217
計	187	130	268	585

図１　回答者の学級担任等の状況



	幼稚園	公立保育所	私立保育所	全　体
無記入	2	1	0	3
60歳以上	4	1	1	6
50歳台	13	21	19	53
40歳台	16	47	46	109
30歳台	29	34	51	114
20歳台	123	26	151	300
計	187	130	268	585

図３　回答者の年齢

所」「障害児施設」「交流保育での受け入れ」での経験の有無についてそれぞれ回答を求めた結果を図２に示した。

「幼稚園・保育所」で経験があると回答した割合は公立保育所が最も高く58％であったが，最も低い「幼稚園」でも39％の教諭が経験していた。「障害児施設」で経験があると回答した割合は，全体に低く，最も高い「公立保育所」でも14％であった。「交流保育での受け入れ」経験は，公立保育所では56％と高いものの，幼稚園，私立保育所では10％台であった。

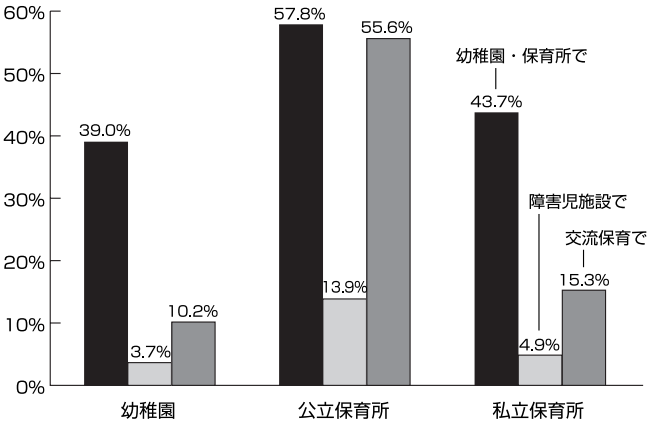
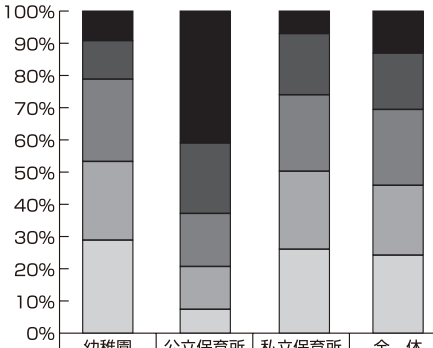


図２　回答者の障害児保育の経験



	幼稚園	公立保育所	私立保育所	全　体
20年以上	17	54	21	92
10年以上20年未満	22	29	50	101
6年以上10年未満	46	20	59	125
3年以上6年未満	48	18	68	134
3年未満	54	9	70	133
計	187	130	268	585

図４　回答者の保育経験年数

４．回答者の年齢と保育経験年数

回答者の年齢と保育経験年数について回答を求めた結果を図３と図４に示した。年齢は，幼稚園，私立保育所では20歳台が最も多く約60％を占めるのに対し，公立保育所は40歳台が多いものの各年齢層がほぼ均等に分布した。保育経験は，幼稚園，私立保育所では「３年未満」が最も多く約30％を占めるのに対し，公立保育所では「20年以上」が約40％を占めていた。

Ⅳ　結果２．気になる子どもについて

この項目については，今年度保育している子どもについて，学級担任をしている保育者には自分の学級の子どもについて，それ以外の保育者には現在か

かわっている子どもについて回答するよう求めた。

1．気になる子どもとは

設問「あなたにとって『気になる子ども』とはどのような子どもですか」に対する自由記述（複数内容回答可）には552名が回答した（無記入33名）。回答を内容ごとに分割したところ1,409に整理でき，表３に示す９カテゴリーに分類した（【　】内の数字は回答件数を示す）。

（1）全体結果

全回答1,409件の回答を上記の９カテゴリーで分類した結果を図５に示した。気になる子どもの状況として上げられた中で，回答が多かったのは「発達上の問題」「コミュニケーション」「落ち着きがない」「乱暴」「情緒面での問題」の順であった。

（2）子どもの学年別による結果

回答者が受け持つ学級の学年によって分類した結果を図６に示した（ここでは「いない・無記入」の回答を除いた）。

回答が多かった３カテゴリーについてみると，「発達上の問題」は加齢とともに回答割合が増加した。「コミュニケーション」「落ち着きがない」とはともに，４歳児では一度減少し，５歳児では再び増加する傾向がみられた。

これらの３カテゴリー以外を見ると，「乱暴」が５歳児では減少している。「しようとしない」は未満児や３歳児に比べて４，５歳児では増加している。

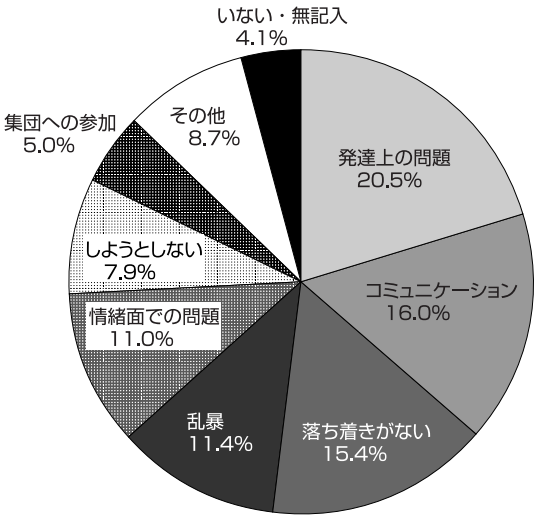


図５　「気になる子ども」全体結果

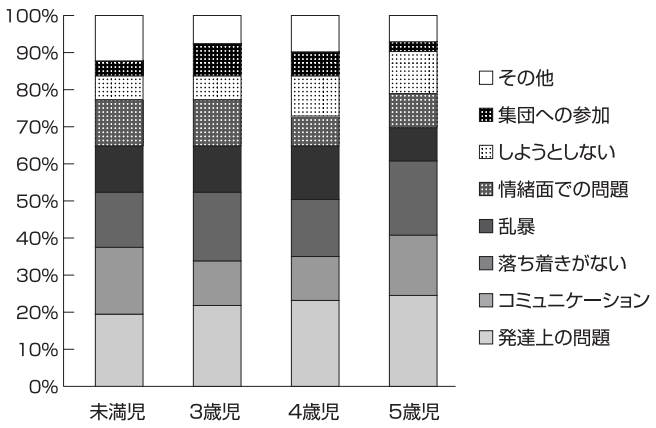


図６　「気になる子ども」学年別結果

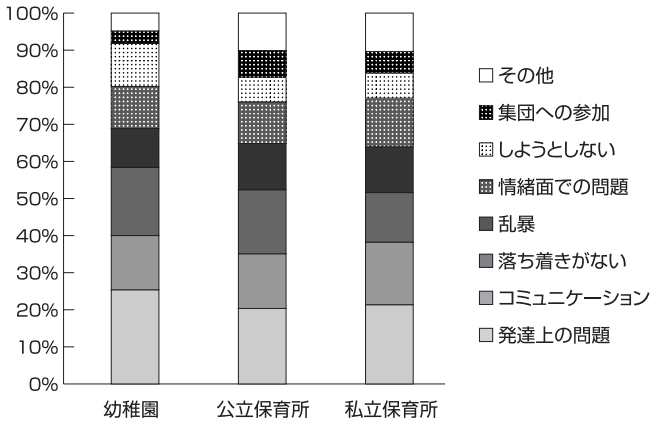


図７　「気になる子ども」回答者の所属機関別結果

「情緒面での問題」はどの学年層でも一定割合でみられた。「集団への参加」は３歳児が最も多く４，５歳児では減少している。

（3）回答者の所属機関別の結果

回答者の所属機関別に分類した結果を図７に示した。回答傾向をみると，公立保育所と私立保育所はほぼ同様であり，幼稚園と保育所２群とで差がみられた。

「発達上の問題」「しようとしない」の２カテゴリーは，幼稚園の方が保育所２群よりも回答割合が多かった。「その他」は保育所の方が幼稚園よりも回答割合が多かった。

2．気になる子どもがいる場合の課題

設問「気になる子どもがいる場合，どのようなことが保育上課題になっていますか？」に対する自由記述（複数内容回答可）には511名が回答し（無記

表３ 「気になる子ども」についての自由記述

①発達上の問題【289】
a：**発達の遅れ（主として行動面）**
・他の子と同じことが出来ない　・年齢相応に手先（制作など）が発達していない
・周りについていけない　・他の子に比べて少し行動が遅い
b：**言語発達の遅れ（主として表出）**
・言葉が遅い　・お話しが出来ない子ども
c：**理解力がない**
・指示された言葉や質問された事に対しての理解に乏しい
・何回かの言葉掛けが必要
d：**こだわりなど特異な行動**
・こだわりが強い　・パニック状態になると周りが見えなくなる　・奇声　・異食
e：**診断や障害名の表記**
f：**発達がアンバランス**
・理解力はあるがやろうとしない
・知識や言葉の発達と社会性など精神的な発達のアンバランスな子
②コミュニケーション【226】
a：**音声言語の問題**
・発音がはっきりしない子・発音が幼い　・吃音のある子
b：**視　線**
・目が合わない　・目が合わせられない　・目を見て話しが出来ない
c：**その他のコミュニケーション**
・コミュニケーションが成立しない　・何を言っても返事をしない
・大人の言うことが入らない　・言葉がおうむ返し　・自分の世界に入ってしまう
③落ち着きがない【217】
a：**落ち着きがない**
b：**集中力に欠けている**
・集中する時間が短い　・注意力が散漫
④乱　暴【161】
・つねる、ひっかく、ける、首をしめる　・生き物を殺す
・友達に対して口調が悪い子　・ふとした瞬間にかみついてしまう
⑤情緒面での問題【155】
・感情のコントロールができない　・情緒不安定で怒りやすい
・５歳児とは思えない程に我慢して自分を押さえたり、待つ事ができない子
・かんしゃく　気性がはげしい
・場の状況や雰囲気をつかめず場違いな行動をしている子
・自虐的な子　・嘘をつく子　・陰で悪いことをする子ども
・執拗に担任を求めてくる
・男児だが女児のような振る舞い
・いつも爪を噛んだり・鼻に指を入れる子　・ねぐずりが激しい
⑥しようとしない【111】
a：**無気力**
・無気力　・やる気のない子ども
・自分で食べずに、食べさせてもらう
・自分の行動全て、保護者に確認しないと行動できない子
b：**表現が乏しい、友だちの輪には入れない**
・自分の気持ちをなかなか表せない子
・おとなしく、自分から「一緒に遊ぼう」と誘えない為、一人遊びが多い子
・一人で遊んでいる事が多く、自分から友達の輪に入ろうとしない子ども
・周りや大人の目を気にして自分を出しにくい子
⑦集団への参加【71】
・集団活動が苦手　・集団行動ができない　・集団保育になじまない
⑧その他【122】
a：**生活基本動作**
・排泄が自立していない　・食事（好き嫌いの激しい子　・偏食のある子）
b：**家庭環境や保護者**
・虐待　・保護者の協力が得られない　・家庭が不安定で子どもも不安定
c：**健康面**
・アレルギー
d：**その他**
⑨いない・無記入【57】

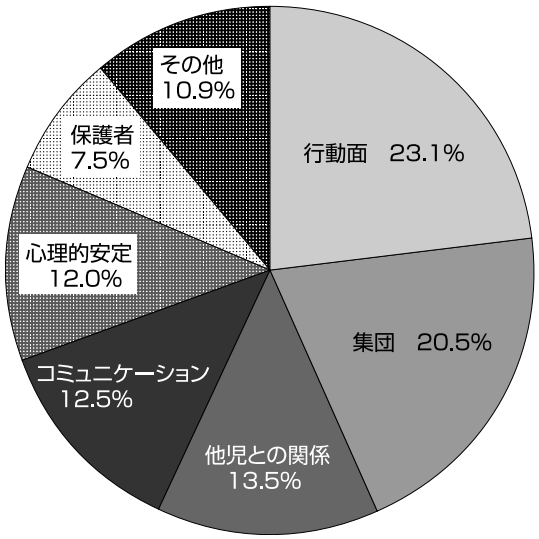


図８ 「気になる子ども」の保育上の課題 全体結果

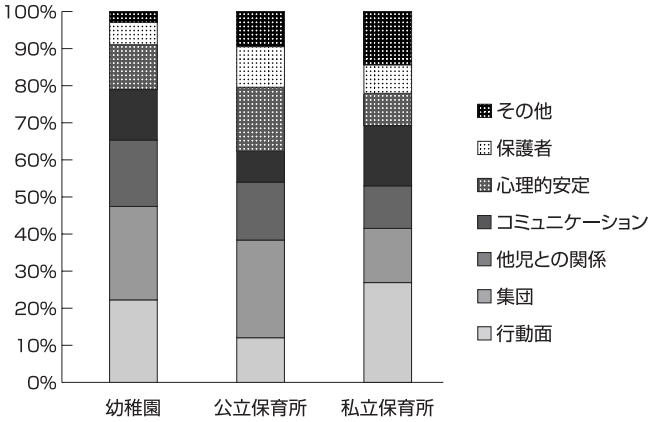


図10 「気になる子ども」の保育上の課題 回答者の所属機関別結果

入74名），回答件数は延べ615件となった。回答を内容ごとに分割し整理した結果，表４に示す７カテゴリーに分類した（【 】内の数字は回答件数を示す）。以下，カテゴリーごとに回答の例を示す。

（１）全体結果

全回答615件について，上記の７カテゴリーで分類した結果を図８に示した。

保育上の課題として上げられた中で回答が多かったのは「気になる子どもの行動面の課題」（23％），「集団での活動における課題」（20％），「他児との関係」（14％），「コミュニケーション」（13％）「心理的安定」（12％）の順であった。

（２）子どもの学年別の結果

回答者が受け持つ学級の学年によって分類した結果を図９に示した。

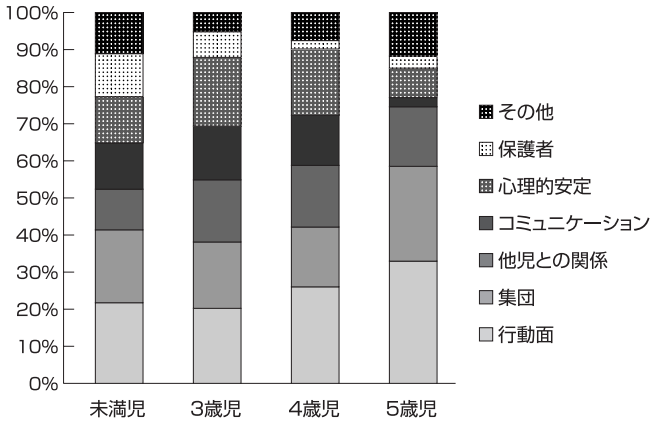


図９ 「気になる子ども」の保育上の課題 学年別結果

「気になる子どもの行動面の課題」は，未満児（22％）から３歳児（20％）では一旦減少し，再び４歳児（25％），５歳児（31％）で増加する傾向がみられた。「集団での活動における課題」でも同様の傾向がみられ，未満児（21％），３歳児（18％），４歳児（19％），５歳児（28％）と，３歳児で最も少なく，４歳児，５歳児と増加傾向を示した。一方，「コミュニケーション」と「心理的安定」についての課題は，未満児（それぞれ12％，11％），３歳児（14％，18％），４歳児（16％，16％）では比較的高い割合を占めているが，５歳児では「コミュニケーション」が４％，「心理的安定」７％と割合が急に減少する傾向がみられた。

（３）回答者の所属機関別の結果

図10に各７カテゴリーの割合を所属機関別に分類した結果を示した。

回答傾向を見ると，「気になる子どもの行動面の課題」が最も多くの割合を占めていたのは私立保育所の28％で，公立保育所では13％と比較的低い割合だった。「集団での活動における課題」は，幼稚園，公立保育所がともに25％と全体の４分の１を占めているのに対して，私立保育所では16％と比較的低い割合だった。「他児との関係」は幼稚園（18％），公立保育所（17％）で高い割合だったが，私立保育所では９％で比較的低い割合であった。また，「保護者との連携に関すること」の割合は公立保育所において比較的高い（公立保育所11％，私立保育所７％，幼稚園５％，）ことが，特徴的な傾向であった。

表4 「気になる子がいる場合の課題」についての自由記述

①気になる子どもの行動面の課題【142】
a：**気になる子どもの行動・生活面での課題**
・落ち着きがない
・多動
・少しでも長く座って話を聞くようになるにはどうしたらいいか
・噛み付いたり引っかいたりする子にどうしたらいけないことだとわかってもらえるか
・自分で行動せず次の行動を待っている
・生活リズムを作ること
・衣服の着脱などずっと声をかけていないとできない
b：**気になる子ども自身の集団における課題**
・その子がクラスの生活の流れに遅れてしまう
・他児と一緒にできるようにするにはどのように関わっていけばいいか
・集団の中でのその子の居場所
②集団での活動における課題【126】
a：**集団活動への影響**
・集団を乱してしまう
・多動の子どもがいると保育のリズムが乱れてしまう
・他児を待たせてしまう
・他児もまねをして盛り上がるので話が入らなくなる
b：**集団における指導と個別の指導のバランス**
・その子の個性を尊重して保育にあたりたいが集団の中の一人として受け入れなければならず、クラスの中でうまくかかわりが持てていない
・集団の中でいかに個別に目を配ったり、手をかけていくか
・その子一人にかかりきりになったり、また十分に手をかけてあげられない
③他児との関係【83】
a：**他の子どもへの影響（トラブル）**
・他の子への怪我などへの配慮
・他の子どもたちとのトラブル、怪我への発展の予防
・かみつきは未然に防げるようにする
b：**気になる子どもについての他の子どもの理解**
・周りのお友達がその子のことをマイナス面の印象ばかりで受け取らないようにしていく
・他児とその子の間に入り思いを代弁すること
・他児への説明
④コミュニケーション【77】
a：**保育者とのコミュニケーション・言葉かけ**
・子どもにどのように接すればよいか、具体的な言葉かけ
・その子の意思を汲み取ること
・言葉がたくさん出てくるようにたくさん話しかける
・話をして納得していけるようにすること
b：**他の子どもとのコミュニケーション**
・他児の輪の中にどう溶け込んでいけるか
・友達との関わり方
・他の子とも上手に付き合って園で生活していけること
⑤気になる子どもの心理的な安定・子どもの理解【74】
・大泣きしたり、異常に甘えたり、感情をぶつけてくるので、その気持ちを受け入れ十分スキンシップを取る
・信頼関係を作っていくこと
・その子の気持ちに寄り添い思いを共感すること
・その子にどうやって興味を持たせることができるか、そのためのさまざまな配慮
⑥保護者との連携に関すること【46】
・家庭との連絡を取り合い一緒に考えていくこと
・保護者に対して気になる部分をどのように伝えていくか
・親への指導
⑦その他【67】
・なし
・クラス担任同士の共通理解　・園全体での把握
・変わった様子を記録に残すこと
・卒園後の生活に対応できるように　など

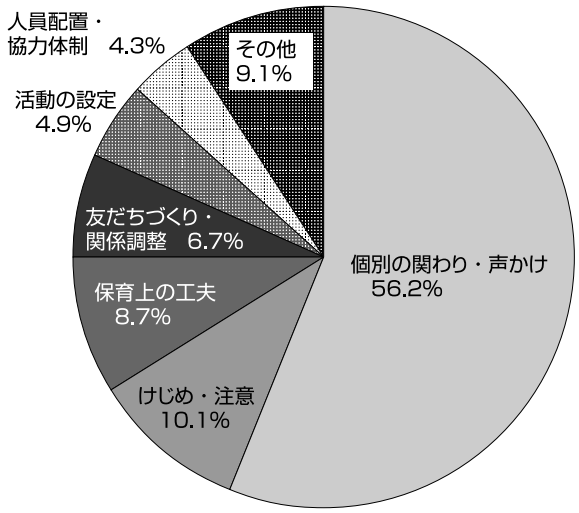


図11 「気になる子ども」に対して試みていること
全体結果

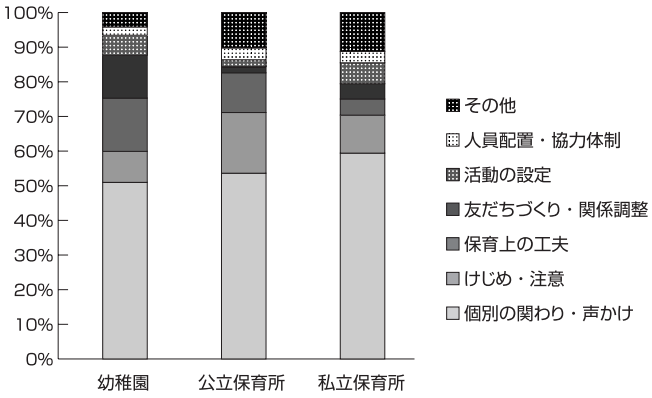


図13 「気になる子ども」に対して試みていること
回答者の所属機関別結果

3．気になる子どもに試みていること

設問「気になる子どもに対して，いま，試みていることがあれば書いてください」に対する自由記述（複数内容回答可）には478名が回答し（無記入107名），回答件数は延べ553件となった。回答を内容ごとに分割し整理した結果，表５に示す７カテゴリーに分類した（【　】内の数字は回答件数を示す）。以下，カテゴリーごとに回答の例を示す。

（1）全体結果

全回答553件について，上記の７カテゴリーで分類した結果を図11で示した。いま試みていることについての回答として多かったのは「個別の関わり・声かけ」（56％），「けじめ・注意」（10％），「保育上の工夫」（９％），「友だちづくり･関係調整」（７％）であった。

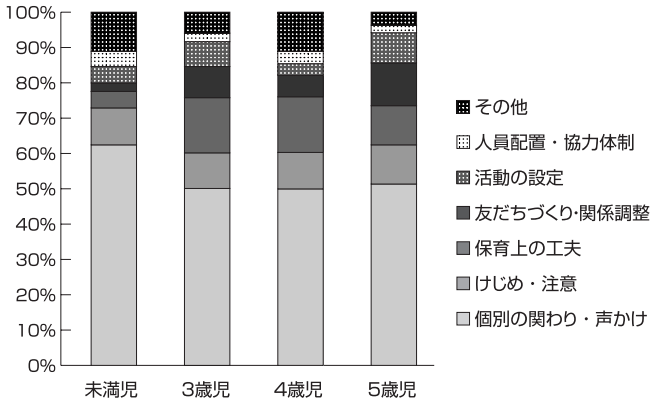


図12 「気になる子ども」に対して試みていること
学年別結果

（2）子どもの学年別結果

回答者が受け持つ学級の学年によって分類した結果を図12に示した。

「個別の関わり・声かけ」は特に未満児では63％と高い割合を示したが，他の学年でも50％前後を占めている。「けじめ・注意」は各学年において10％～12％と同じような傾向であった。同様に，「人員体制・協力体制」も各学年において２％～４％と同じような傾向がみられた。「保育上の工夫」「友だちづくり・関係調整」「活動の設定」はそれぞれの学年群でばらつきがみられたが，概して未満児ではその割合が低かった。また，５歳児での「友だちづくり・関係調整」の割合が比較的高いこと（15％）が特徴的な傾向であった。

（3）回答者の所属機関別の結果

図13に，各７カテゴリーの割合を回答者の所属機関別に分類した結果を示した。

回答傾向を見ると，どの機関でも「個別の関わり・声かけ」が過半数を占めていたが，特に私立保育所で64％と高い割合がみられた。「けじめ・注意」については公立保育所が16％で高く，幼稚園と私立保育所（それぞれ８％）の倍の割合を占めていた。また，「保育上の工夫」は幼稚園で15％，公立保育所９％，私立保育所４％，「友だちづくり・関係調整」は幼稚園で13％，公立保育所２％，私立保育所５％であり，これらのカテゴリーについては幼稚園で比較的多くの割合を占めているのが特徴的な傾向であった。

表5 「気になる子に対する試み」についての自由記述

①個別の関わり・声かけ・スキンシップ【311】
・たくさん甘えさせてあげて欲求を満たす
・できるだけ1対1で関わる
・目を見てゆっくり話す
・できるだけスキンシップをとる
・あきらめず何度もその子どもとの言葉のやり取りを交わす
②けじめ・注意【56】
・いけないことはいけないと伝える
・しっかりと注意する
・いいことと悪いことの区別がつくように言い聞かせる
・自分のしていることが回りの子にとってどう思うことなのか考えられるよう話をする
③保育上の工夫【48】
・気持ちを落ち着かせるときには一人のスペースを用意する
・何の針までがんばろうなど目標を決めてとりくみ、できたときはほめる
・興味を引くようなこと（カードや自分のマークを同じ絵のシールを貼るなど）
・制作に対して、その子はみんなの１回の説明に対し、２，３回、または見本があるので横に置くなどする
④友だちづくり・関係調整【37】
・他児との関わり方を保育者が見本となって伝える
・トラブルのおきにくい友達を近くに座らせ一緒に活動する
・保育者が友だちとの仲立ちをする
⑤活動の設定【27】
・協力しなければできない遊びや行動を行う
・本児の好きな活動を設定する
・絵本など物語を読み聞かせ、その後（物語に関する）クイズを出す
⑥人員配置・協力体制【24】
・クラスの担任同士の共通理解
・園全体での把握
・記録をつけて共有する
・援助の仕方を職員同士で同一にする
⑦その他【50】
・特にやっていない
・保護者との連携
・よく熱を出す子や食の細い子への配慮など

Ⅴ 結果３．保護者について

保護者に関する設問は以下の２カテゴリーで，今年度保育している子どもの保護者について，学級担任は担当学級の保護者について，それ以外の回答者には現在かかわっている子どもの保護者について回答を求めた。

１．気になる保護者とは

設問「あなたにとって『気になる保護者』とは，どのような保護者ですか？」に対する自由記述（複数内容回答可）には466名が回答し（無記入119名），回答件数は延べ719件となった。回答を内容ごとに分割し整理した結果，表６に示す13カテゴリーに分類した（【 】内の数字は回答件数を示す）。以下，カテゴリーごとに回答の例を示す。

（１）全体結果

全回答719件について，上記の13カテゴリーで分類した結果を図14に示した。保育者が気になる保護者として回答が多かったのは，「しつけ・関わりに関すること」（13％），「子どもに無関心」（12％），「伝わらない」（11％）「子ども観」「過保護」「保護者中心」の順であった。

（２）回答者の所属機関別の結果

幼稚園，公立保育所，私立保育所と所属機関別に分類した結果を図15に示した。回答傾向を比較すると，いくつかのカテゴリーで，幼稚園群と公立保育所群で特徴的な傾向がみられ，私立保育所は，概ねその中間に位置づくものであった。

表6 「気になる保護者」についての自由記述

①保育者の話が伝わらない【76】
・保育者の話をきちんと聞いてくれない
・話が一方的
・思い込みが強く聞く耳を持たない
・園での様子を伝えても理解してもらえない
②子どものことや必要なことを話さない【30】
・子どもの体調のことなどきちんと伝えてくれない
・家の様子を聞いても本当のことを話してくれない
・職員と目をあわさず話そうとしない
③園に関心が薄い、協力的でない【34】
・園への協力体制が見られない
・園のお知らせや掲示物などに関心がなく見ていない
④しつけや関わり方が気になる【94】
・自分の子どもに注意ができない
・子どもとの関わり方がわからない
・子どもと友達感覚で接している
・子どもに指示ばかりして待ってあげない
・子どもと対等な立場でけんかをしてしまう
⑤子どもに対して過保護、過干渉【56】
・子どもに手を貸しすぎる
・子どもの自主性を生かせず過保護になる
⑥子どもに対して無関心、放任【87】
・自分の子どもに関心がない
・子どもの面倒をあまりよく見ていない
⑦子どもに対して乱暴【39】
・人前でも子どもをすぐ叩いてしまう
・言葉遣いが荒い
・言葉で子どもを傷つける
⑧子ども観や子どもの見方が気になる【62】
・自分の子どものことしか見えていない
・他の子どもと比較したり同じ持ち物を持たせたりしたい
・自分の子どもがよい子でなければ認められない
・自分の子どもが正しいと思っている
⑨ルールが守れない【38】
・提出物を出さない
・忘れ物が多い
・いつも遅刻をして連絡してこない
⑩子どもより自分（保護者）中心【53】
・自分の都合やペースで子どもをふりまわす
・大人中心の生活を当然としている
⑪子どもや育児に対する不安・心配【41】
・子どものことで過度に心配をしている
・自分の子どもの気になるところや不安なところばかり話す
・細かいことばかりが気になる
⑫保護者の病気や病的な状態【24】
・精神を病んでいる保護者
・精神的に安定していなくて目が合わない
・無気力
⑬その他【85】
・いない
・タバコのにおいをさせている
・相談相手がいない保護者
・子育てが園任せ
・障害のある兄弟がいる
・子どもに依存している保護者
・生活能力が低い
・虐待が疑われる

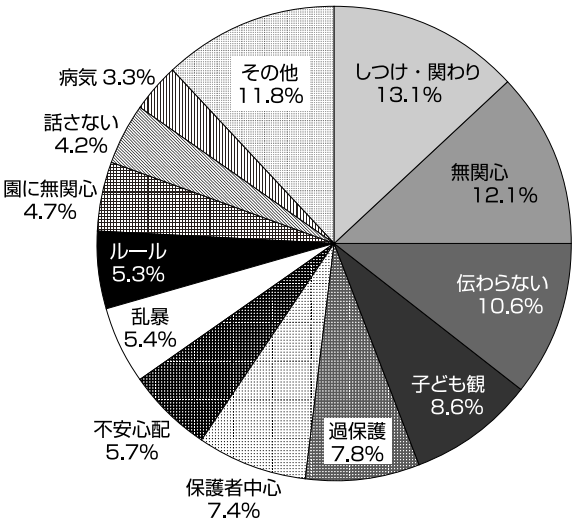


図14 「気になる保護者」全体結果

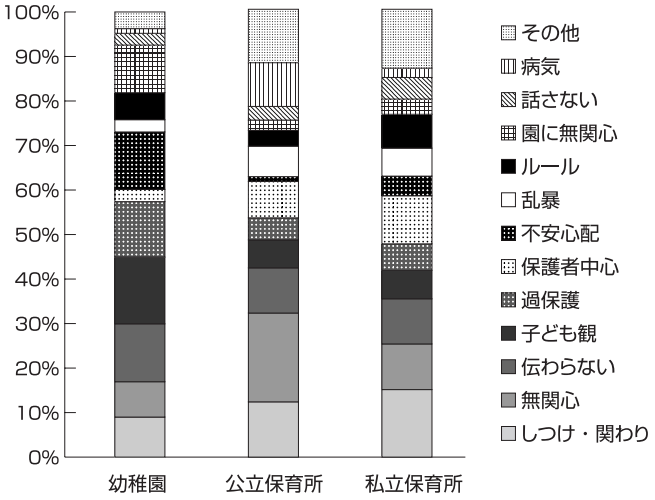


図15 「気になる保護者」回答者の所属機関別結果

特に傾向が顕著にみられたカテゴリーについてみてみると，幼稚園では「子ども観」(15%)，「不安･心配」(14%)，「過保護」(12%)，「園に無関心」(10%）のカテゴリーが，高い割合を示したのに対して，公立保育所ではこれらのカテゴリーの占める割合はそれぞれ６％，１％，５％，２％と低かった（私立保育所においては，これらのカテゴリーはそれぞれ７％，４％，７％，３％)。

一方，公立保育所で幼稚園と比べて特に特徴的な傾向がみられたカテゴリーは，「子どもに無関心」(20％)，「保護者中心」（９％)，「乱暴」（７％)，「保護者の病気･病的状態」（９％）のカテゴリーで，これらのカテゴリーは幼稚園ではそれぞれ８％，２％，３％，１％と比較的低かった。

私立保育所では，これらのカテゴリーはそれぞれ10%，10%，６％，２％であり，「保護者中心」と「乱暴」のカテゴリーについては，公立保育所とほぼ同程度の割合であった。

２．保護者からの相談

設問「保護者から受ける相談で多いものはどのような内容ですか？」に対する自由記述（複数内容回答可）には436名が回答し（無記入149名)，回答件数は延べ691件となった。回答は表７に示す６カテゴリーに分類した（【　】内の数字は回答件数を示す)。

（１）全体結果

全回答691件の回答を上記の６カテゴリーで分類した結果を図16に示した。保護者から受ける相談として，回答が多かったのは「家庭生活について」(40%）と「友だちとのかかわりについて」(28%）であった。

（２）子どもの学年別の結果

回答者が受け持つ学級の学年によって分類した結果を図17に示した（「いない・無記入」の回答を除いた)。

回答が多かった２カテゴリーについてみると，「家庭生活について」は未満児で約60％と最も多かった。加齢とともに回答割合は減少して５歳児では約10％となる。

一方「友だちとのかかわりについて」は未満児では約10％であったが，３歳児では急増して約40％となり，４歳児では約50％と最も回答割合が多かった。

これらの２カテゴリー以外では「園生活について」が未満児の約10％から３歳児の約20％に増加している。また「発達や行動面について」は，４歳児の約10％から５歳児の約20％に増えている。

（３）回答者の所属機関別の結果

回答者の所属機関別に分類した結果を図18に示した。回答傾向を見ると，公立保育所と私立保育所はほぼ同様であり，幼稚園と保育所２群とで差がみられた。

表７ 「保護者からの相談」についての自由記述

①家庭生活について【275】
a：食事について
・食事の好き嫌いが激しい子で、どのように克服したらよいか
・食事マナー（姿勢、箸の持ち方、進み具合）について
・朝早くから夜（夕）遅くまで働き、外食が多い
b：排泄について
・トイレットトレーニングについて（時期、方法等、親の希望も含め）
c：睡眠（生活リズム含む）について
・夜眠らなくて困る　・夜ふかし→朝起きれない→朝ごはんが食べられない
d：しつけ（反抗期・言うことを聞かない等含む）について
・子どもが言うことを聞かない、わがまま
・叱られても反省の姿が見られない
・本当は自分は出来るのに、甘えているのか家だと自分でやらない
②友だちとのかかわりについて【196】
a：友だちはいるか、うまくいっているか
・子どもが友達と関わりを持って遊べているかどうか
b：友だちとのトラブルについて
・トラブルがあった時に家で子どもの言い分はこうだが実際のいきさつはどうだったか
・友達とのトラブルの時、子どもに対してどう接すればよいか
c：友だちに手をだしたり、乱暴していないか
・すぐ手が出てしまう
・すぐに手が出てしまうので、どのように対処したらいいか？
d：友だちからいじめられていないか
・～ちゃんにぶたれたといっています
・仲間はずれにされている、あの友達とは遊ばせたくない
③園生活について【98】
a：集団での様子について
・集団生活が出来ているか
・行動・活動が皆と一緒にできているのだろうか
・保育についていっているか
b：園における基本的生活習慣
・園で排泄は大丈夫か
・お弁当をたべているか
c：園での様子を知りたい
・園ではどうですか
④発達や行動面について【84】
a：発達や行動面について
・話を聞けているか。しっかりと座れているか。字がまだ読めない、書けない
・他の子はどうか
・自分の子は、他の子と比べておくれていませんか
b：就学について
・小学校できちんとやっていけるかなど
⑤健康面について【19】
・保育所で流行している病気や風邪について
⑥その他【19】
・園で協調性に欠け、勝手な行動をとっていたりすること聞くとまさかうちの子がという親
・自分の子どもはしっかり躾ているが、あの人の家はやりっ放しで困る
・クラス担任に聞きそびれた内容や園行事の確認など
・保育士の関わり方
・家庭内での影響ができるかもしれない（夫婦間のいざこざ等）
・家庭内ＤＶ
・習い事の相談（させた方がいいかなど）
・保護者同士の付き合いについての相談
・仕事の悩みや保護者自身の悩み　反抗期のかかわりについて
・子育ての問題や、精神的心労など（精神疾患）
・こちらから気になる人からは、相談を受けない

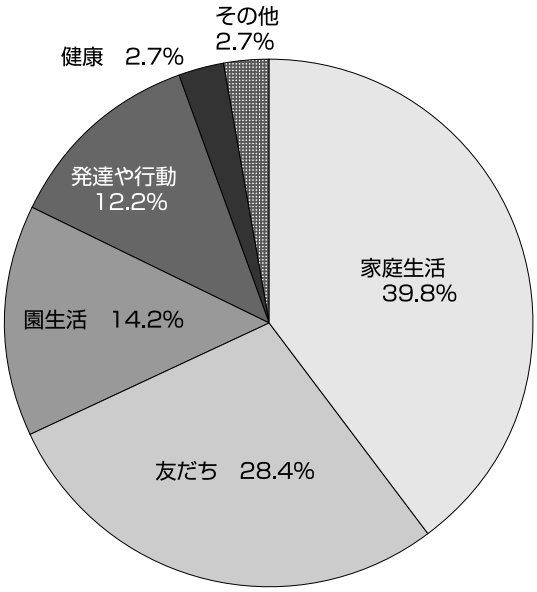


図16 「保護者からの相談」全体結果

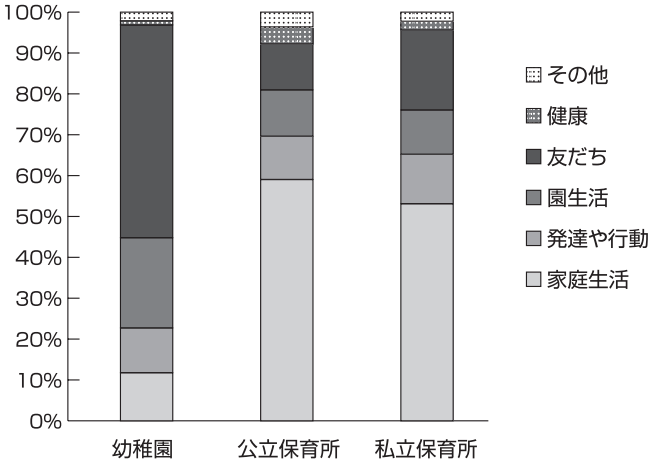


図18 「保護者からの質問」回答者の所属機関別結果

特に差が大きかったのは「家庭生活について」「友だちとのかかわりについて」の２カテゴリーで，これらについては幼稚園と保育所２群とで逆の傾向がみられた。即ち，幼稚園では「友だちとのかかわりについて」が53％で「家庭生活について」12％であったのに対し，保育所２群では「友だちとのかかわりについて」が12％（公立）18％（私立）で「家庭生活について」57％（公立）53％（私立）であった。

Ⅵ 結果４．専門機関等に期待すること

設問「子どもの発達や教育・保育に関する専門機関などに期待することについて，（表８に示す８）選択肢から３つ選んでレ印をつけて下さい」に対する回答を整理した。専門機関については「子どもの発達や教育・保育に関する」専門機関と表記し回答者の判断に任せた。したがって特定の機関を指定してたず尋ねてはいない。

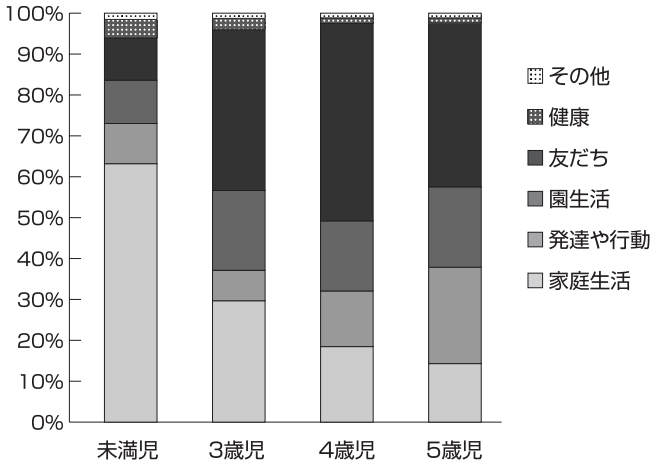


図17 「保護者からの質問」学年別結果

１．全体結果

全585名の回答結果について図19に示した。結果は回答者数（585名）に対する回答割合で表示した。

結果は「保育内容･方法をアドバイスしてほしい」（66％）「子どもの様子を見てほしい」（61％）の２選択肢が６割を越えて回答された。ついで「職員に対して講義をしてほしい」（39％）が多く，続いて「保護者に対して講義してほしい」（32％）「保護者に対して子どもの状態の説明をしてほしい」（27％）が多く回答された。

以下に，回答の多かった上記５選択肢について更に検討する。

２．回答者の所属機関別の結果

５選択肢について回答者の所属機関によって比較した結果を図20に示した。

「子どもの様子を見てほしい」「保護者に対して講義してほしい」については各所属機関群とも顕著な差はみられなかった。これら以外の３選択肢については「幼稚園」と「公立保育所」は同様の回答傾向であり，「私立保育所」は異なる傾向を示した。私

表8　専門機関に期待することについての選択肢

①園に来て、子どもの様子を見てほしい
②園に来て、保育内容・方法をアドバイスしてほしい
③園に来て、私の悩みを聞いてほしい
④園で子どもに対して、個別的なかかわりをしてほしい
⑤園で保護者に対して、子どもの状態の説明をしてほしい
⑥園の職員に対して、講義をしてほしい
⑦園の保護者に対して、講義をしてほしい
⑧その他（具体期に：　　）

立保育所では「保育内容・方法をアドバイスしてほしい」が他の２群よりも高く70％以上の職員が回答している。また，「職員に対して講義をしてほしい」も他の２群が約30％の回答割合であるのに対し「私立保育所」は約50％と高くなっている。

３．障害児保育経験の有無による結果

５選択肢について，回答者の障害児保育経験の有無で比較した結果を図21に示した。

「子どもの様子を見てほしい」と「保護者に対して講義してほしい」については「経験あり」群と「経験なし」群に顕著な差はみられなかった。「保育内容・方法をアドバイスしてほしい」と「職員に対して講義をしてほしい」については「経験なし」群の方が高かった。

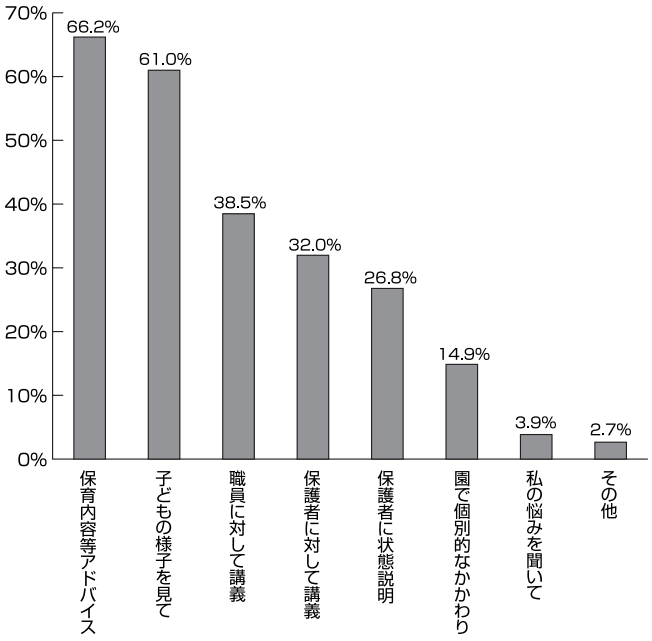


図19　専門機関への期待　全体結果

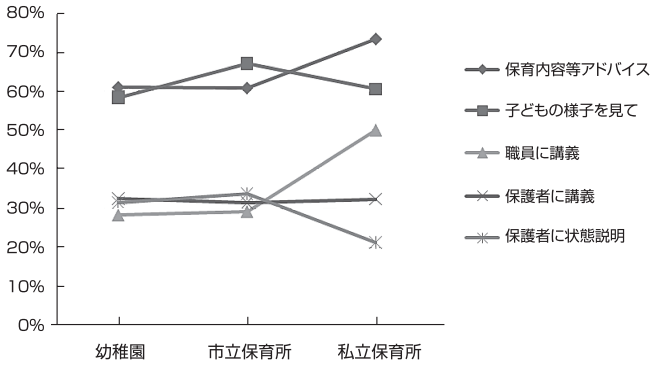


図20　専門機関への期待　回答者の所属機関別結果

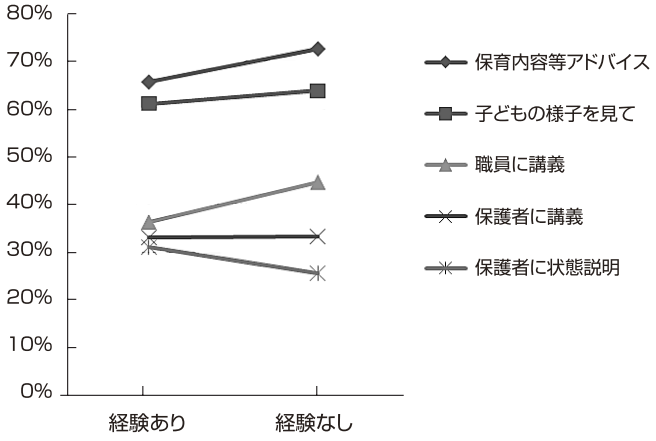


図21　専門機関への期待　障害児保育経験別結果

４．経験年数別結果

５選択肢について，回答者の経験年数を５段階に分け結果を比較したものを図22に示した。５段階とは，３年未満（122名），３年以上６年未満（134名），６年以上10年未満（97名）10年以上20年未満（129名），20年以上（92名）である。無記入が11名いたため合計は574名の回答を分析した。

「保育内容・方法をアドバイスしてほしい」について３年未満が最も高く75％であるのに対し，経験が長くなるにつれて回答割合が減少し20年以上では約60％となっている。また「職員に対して講義をしてほしい」も３年未満が最も高く45％であるがやはり経験年数が長くなるにつれて回答割合が減少し20年以上では25％となっている。一方「保護者に対して子どもの状態を説明してほしい」は３年未満では18％であったのに対し，経験が長くなるにつれて

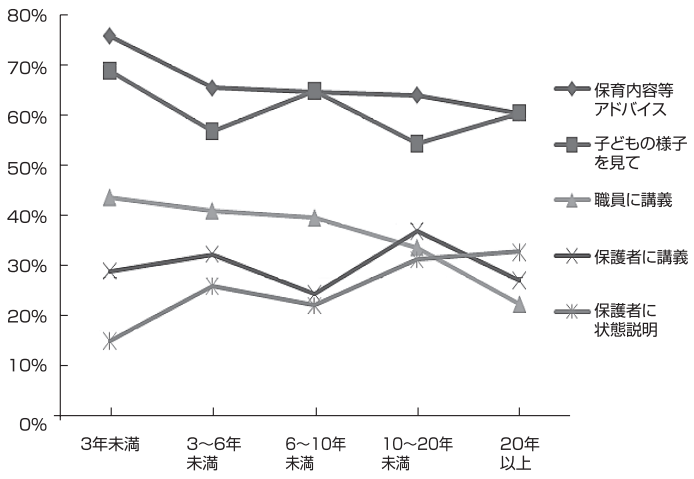


図22 専門機関への期待 保育経験年数別結果

回答割合が増える傾向があり，20年以上では35％となっている。20年以上では，「保護者に対して子どもの状態を説明してほしい」の方が「職員に対して講義をしてほしい」よりも回答が多くなっている。

Ⅶ 考 察

1．保育者から見た「気になる子ども」とその保育

（1）「気になる子ども」とは

全体結果をみると，回答内容は，発達障害が想定されるものから，無気力な子ども，自分を出しにくい子ども，被虐待の疑いがある子どもやアレルギーのある子どもまで多岐にわたっている。近年発達障害に関心が寄せられているが，保育者が「気になる子ども」として見ているのは，発達障害のある子どもだけではないことがわかった。

回答を多い順に整理すると，「発達上の問題」「コミュニケーションの問題」「落ち着きがない」となり，この３カテゴリーが全体の52％であった。またこの３カテゴリーは，学年別では４歳児を除く各学年で，所属機関別では全ての機関で上位を占め，回答数の順位も同様であった。このことから，保育者は，子どもたちの発達の遅れやアンバランス，構音や吃音といった音声言語や視線の合い方などのコミュニケーション，落ち着きのなさや集中力の欠如等が，特に気になっていることがわかった。

学年別に見ると，この「発達上の問題」「コミュニケーションの問題」「落ち着きがない」の３カテゴリーが５歳児で最も多くなっている（57％）。５歳児という卒園，就学が近い学年で，保育者が特にこれらを気にしていると考えられる。また「しようとしない」が，未満児や３歳児に比べ，４・５歳児で増加している。これについては，保育者は，子どもが身の回りのことを学年相応に自力でできるようになることを期待しているが，実際には，期待通りになっていない子どもがいて，そのことが気になっているものと考えられる。

一方「乱暴」は５歳児になると大きく減少している。これについては，５歳児になり，「乱暴な」行動ではなく音声言語で対人行動をとろうとするようになるためと考えられる。しかしながら「コミュニケーションの問題」が５歳児で増加していることや，加齢とともに「対人トラブル」が増加するとの指摘（本郷・澤江・鈴木ら，2003[5]）を考え合わせると，行動面では確かに乱暴さはなくなったものの，音声言語によるコミュニケーション上の問題となって現れているとも考えられる。

本郷らは「対人トラブル」の原因が，気になる子ども本人だけでなく，周囲の他児にもあることを指摘している。このことは本研究では確かめられないが，気になる子どもの言動の原因を，本人にのみ求めるのではなく，周囲他児との関係にも着目していく必要があるだろう。

所属機関別に見ると，「発達上の問題」と「しようとしない」が公立保育所と私立保育所の２群に比して幼稚園に多く，「その他」が幼稚園に比して保育所２群に多かった（ここで「その他」とは生活基本動作や家庭環境等を指す）。本調査では，保育所の未満児の担当者の回答者数が多いことから未満児の特性が強く出ている可能性がある。そのことを踏まえても，幼稚園教諭は全体的に子どもの発達状況を気にする傾向があり，保育所の保育士は全体的に子どもの日常生活を気にする傾向があると考えられる。

（2）「気になる子ども」がいる場合の保育上の課題

全体結果を見ると，「気になる子どもの行動面の課題」と「集団での活動における課題」の２カテゴリーの回答が多く，次いで「他児との関係」「コミュニケーション」「心理的安定」がほぼ同じ割合で並

んだ。「集団での活動における課題」が２番目に多いことから，保育者は気になる子ども本人への支援をしながら，学級全体をどう運営していくかに課題意識を持っていることがわかった。この傾向は，学年別に見た際，５歳児で特に顕著であった。

所属機関別に見ると，３群がそれぞれ異なった回答傾向を示した。幼稚園は「集団」,「行動面」,「他児との関係」の順であり，公立保育所は「集団」,「他児との関係」,「心理的安定」の順，私立保育所は「行動面」,「集団」,「コミュニケーション」の順で回答が多かった。この結果からは，幼稚園と公立保育所では学級経営や他児との関係を重視し，私立保育所では，気になる子ども本人に注目する傾向があると考えられる。

（3）「気になる子ども」に対する試み

全体結果を見ると「個別の関わり・声かけ」が半数以上を占め,「けじめ・注意」と合わせると約66％が個に対する支援に関する内容であった。この結果から，保育者は個に対する声かけや注意などをくり返していることが多いと考えられる。これらは特別な支援というよりも，日常の保育の量的な拡大と言える内容である。学年別でみると未満児が約７割と多く，３歳児以上では約６割であった。学年が下に行くほど割合が高い。所属機関ごとでは幼稚園で５割強，保育所２群で６割強であった。これは保育所には未満児が多いためと思われるが，保育所全体として個に対する支援を重視する傾向があることも推測される。

一方「保育上の工夫」や「友だちづくり・関係調整」,「活動の設定」といった質的に工夫のある支援に関しては回答が少なく，全体で約20％にとどまった。学年別では，未満児が約１割と少なく，３歳以上では２割強から３割強と多かった。これは上述のように，未満児では個に対する対応が多いためと思われる。所属機関ごとでは幼稚園が約３割と多かったが，保育所２群は約１割と少なかった。

なお，少数ではあるが,「人員配置・協力体制」に関する回答があり,「担任同士の共通理解」「園（所）全体で把握」「援助の仕方を職員同士で同一にする」等が記されていた。学級担任が孤軍奮闘せず，幼稚園・保育所全体で支援する体制づくりも,「気になる子ども」への重要な支援の試みである。

２．保護者とのかかわりについて

全体結果を見ると,「気になる保護者」に関する自由記述は「その他」を含めて多岐にわたっており，保育者によって「気になる」内容が大きく異なっていることがわかった。

回答の多い順に整理すると「しつけや関わり方」「子どもに対して無関心，放任」「保育者の話が伝わらない」の３カテゴリーが上位であった。しかし，所属機関ごとの結果には大きな差がみられた。

幼稚園では回答の多い順に「子ども観」「不安心配」「過保護」であった。この結果からは，子どもにかかわろうとする思いが強く，そのために我が子のことばかりを見てしまったり，過度に心配してしまったり，手をかけ過ぎることになってしまう保護者の姿が想定される。興味深いのはこれらの次に回答が多いのが「園に無関心」であり，子どもや幼稚園に関心が強い保護者が多い中，逆に無関心に見える保護者が気になるものと推察される。なお，幼稚園で回答が多かった「子ども観」「不安心配」「過保護」の３カテゴリーは保育所２群では回答が少なかった。

公立保育所では「園に無関心」が際だって多く，ついで「しつけ・関わり方」で,「伝わらない」「保護者の病気」「保護者中心」がほぼ同数であった。また，私立保育所では「しつけ･関わり方」が多く，ついで「園に無関心」「伝わらない」「保護者中心」がほぼ同数であった。

保育所２群の結果から，保育者から見ると，子どもの保育について保育所に任せたままに見える保護者がいて，そうした保護者が気になっているものと考えられる。また，公立保育所では「保護者の病気や病的な状態」の回答が際だって多かった。子どもばかりでなく，保護者にも特別な支援が必要な状況にあると考えられる。

このように，幼児を持つ保護者という点では同じであるはずだが，幼稚園と保育所では，担当者が見ている「気になる保護者」の姿が大きく異なっていることが明らかになった。

保護者から受ける相談に関する結果からも，幼稚

園と保育所２群での保護者の姿に差異がみられた。幼稚園では「友だちとのかかわり」に関する質問が際だって多く，「家庭生活について」の質問が少なかったが，保育所２群では全く逆の傾向を示した。このことは，逆に言えば，幼稚園では特に友達関係について，保育所では特に家庭生活のヒント等について，ていねいに保護者と話し合うことで，保護者との信頼関係が深まる可能性を示唆している。

３．専門機関等への期待

全体結果からは「保育内容等アドバイスしてほしい」「子どもの様子を見てほしい」などの保育に関する回答が多かった。いま担当している子どもについて具体的な助言を求めていると考えられる。一方保護者に関する回答もみられ，子どもばかりではなく保護者とのかかわりに課題を持っていることがうかがわれた。

所属機関別の結果からは，特に私立保育所の職員が保育内容等へのアドバイスや基本的な知識の獲得を強く望んでいるものと考えられる。また，幼稚園と公立保育所では，保護者に関する回答が「職員への講義」よりも上回っており，保護者との関係に課題があることが予測される。

障害児保育経験の有無による結果からは，障害児保育の経験がない職員は保育内容等へのアドバイスや基本的な知識の獲得を強く望んでいるものと考えられる。

また，経験年数別の結果を見ると，全体的には「保育内容・方法をアドバイスしてほしい」の回答割合が高いものの，経験年数によって専門機関等に期待するものは異なっていると言えよう。特に「保護者に子どもの状態を説明してほしい」については経験年数20年以上の保育者に回答が多いことから，経験の長い職員ほど，保護者とのかかわり方に課題意識を持っていると考えられる。

Ⅷ　まとめ

本研究の結果から，特別支援学校の相談担当者や研究者等が，幼稚園，保育所等に機関支援する際，以下のことに留意する必要があると考えられる。

１．幼稚園，保育所等の多様性について

調査結果からは，「気になる子ども」についても「気になる保護者」についても，幼稚園と保育所とで，また，公立保育所と私立保育所とで保育者の捉え方は異なっていた。これらを，幼児の機関として同一に考えるのではなく，機関の属性によって差異があるものと捉えて置く必要がある。

また，本研究では検討していないが，幼稚園，保育所ごとの差異も考慮に入れる必要がある。Holloway（2000）[3]は実地調査から日本の幼稚園が，関係重視型（Relationship-Oriented）幼稚園，役割重視型（Role-Oriented）幼稚園，子ども重視型（Child-Oriented）幼稚園の３種類に分類できるとし，その背景には，社会階層や宗教，公立か私立かという３要素が園長の教育観に影響を与えていると指摘している。このことからも，幼稚園，保育所へ機関支援をする際，それぞれの保育理念や保育方針を十分理解することが重要である。

専門機関に期待することの結果からは，私立保育所の保育者が基本的な知識を得たいという回答傾向が顕著であった。保育所のうち，設置数の49.2％，乳幼児数の53.1％が私立である（厚生労働省ホームページ）。また幼稚園で言えば，設置数の60.4％，幼児数の80.2％が私立である（文部科学省ホームページ）。このことも考え合わせると私立の幼稚園，保育所への支援を充実させていく必要があると考えられる。

２．子どもとかかわりについて

本研究では「気になる子ども」について多岐にわたる回答があり，課題も多数あげられた。気になる子どもの，気になる行動について改善していくことも重要であろう。しかし，幼稚園，保育所には，遊びながら環境と主体的にかかわったり，子ども相互の影響力を活用したりして，子どもの発達を促す機能が元来備わっている。

近年，保育者が障害のある子どもをあるがままに受け入れることを大切にする保育実践や，そうした保育者の姿勢が周囲他児に伝わり，成長を認めあう保育実践が報告されている（平田，2008[2]；鯨岡ら，2005[10]；成瀬，2008[15]；重国，2008[20]；鈴木，

2008[21])。

また，小田（2001）[16] は，「幼児を幼児として，あるがままに受容する」ことが幼児のよさを見ていく出発点であると述べている。その中で「あるがままの受容」と言いながら，目立った行動から子どもの像を作り固定化してしまいがちであることや，反対に目立たない子どもへのかかわりが「教育的死角」になりがちであることに注意を喚起している。このことは本論文で言えば「気になる子ども」の「気になる（目立つ）行動」に目を奪われることなく，気になる，ならないを問わず，一人一人の子どもの存在を意識し，一人一人を見る目を豊かなものにする必要があると言えるだろう。小田はさらに「子どもを一般的な固定化された累計像でとらえるのではなく，常に動的に変化していくものとして」とらえる目を持つことが求められると述べている。

このように「気になる子ども」への直接的支援以外にも，保育者の子どもを見つめる視点を拡げることや周囲他児も含めた環境へのはたらきかけを提案することも重要な機関支援であろう。

３．保護者への支援について

子どもと同様に保護者に気になることがあると，その改善を求めがちである。しかし，久保山・小林（2000）[9] が指摘するように，保護者が保育者（教師）に求めているのは，保護者の話を聞くことであり，その話を踏まえた対応である。その極端な保護者の行動が小野田（2006）[18] の言う保護者から学校への「イチャモン（無理難題要求）」である。しかし，小野田は，保護者が学校にイチャモンが言える状況を学校改革の好機と捉え，子どものことを話題にしながら保護者と教師がつながることを提案している。こうした考え方は困難さに直面している当事者から生まれにくい。機関支援にあたる者が，幼稚園，保育所の困難な状況に寄り添いながらも，当事者とは別の視点も提案していくことが大切であろう。

保育者の保護者に対する視野を広げ，理解を深める方法として，小林（2008）[7] は「保護者自身のこと」「子ども自身のこと」「親子の関係」「親子を取り巻く環境（家族）」「親子を取り巻く環境（地域）」の５観点からなる保護者の状況理解リストを提案している。

幼稚園，保育所へ機関支援をする者は，保育者と共に考え，「気になること」への対応をしつつ，しかし保育者が「気になること」ばかりに捕らわれない保育や保護者とのかかわりができるよう，支援していくことが求められていると考えられる。

謝　辞

ご多忙の中，調査にご協力いただきましたＡ市の先生方に心から感謝申し上げます。

引用文献

１）別府悦子:「ちょっと気になる子ども」の理解, 援助, 保育, ちいさいなかま社, 2006.
２）平田有美：特別な配慮を要する子ども及びその保護者への具体的な支援の在り方―特別支援幼児教室の取り組みから―．第55回全国国公立幼稚園教育研究協議会, 44-45, 2008.
３）Holloway, S. D. : Contested Childhood: Diversity and Change in Japanese Preschools. New York: Routledge, 2000.
４）本郷一夫・飯島典子・平川昌宏・他：「気になる」子どもの保育支援に関する研究１―子どもの行動チェックリストについて―．日本発達心理学会第16回大会発表論文集, 670, 2005.
５）本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・他：保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査. 発達障害研究, 25(1)，50-61, 2003.
６）飯島典子・本郷一夫・杉村典子・他：「気になる」子どもの保育支援に関する研究17―クラス集団の変化と保育環境の関連―．日本教育心理学会第49回総会発表論文集, 218, 2007.
７）小林倫代：障害乳幼児を養育している保護者を理解するための視点. 国立特別支援教育総合研究所研究紀要, 35, 75-88, 2008.（特教研, A-35）
８）厚生労働省：保育所保育指針, 2008.
９）久保山茂樹・小林倫代：保護者の「語り」から考える早期からの教育相談. 国立特殊教育総合研究所教育相談年報, 21, 11-20, 2000.（特殊研, D-159）
10）鯨岡　峻・安来市公立保育所保育士会：障碍児保育・30年―子どもたちと歩んだ安来市公立保育所の軌跡―, ミネルヴァ書房, 2005.

11）楠　凡之：気になる子ども気になる保護者, かもがわ出版, 2005.
12）文部科学省：平成19年度特別支援教育体制整備状況調査結果について, 2008a. http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/03/08032605.htm.（最終アクセス日, 2008-10-22）
13）文部科学省：幼稚園教育要領, 2008b.
14）無藤　隆・神長美津子・柘植雅義・他：「気になる子」の保育と就学支援―幼児期におけるLD・ADHD・高機能自閉症等の指導―, 東洋館出版社, 2005.
15）成瀬早苗：特別な教育的支援を必要とする子への援助. 第30回東海北陸国公立幼稚園教育研究協議会（静岡大会）大会紀要, 42-43, 2008.
16）小田　豊：新しい時代を拓く幼児教育学入門―幼児期にふさわしい教育の実現を求めて―, 東洋館出版社, 2001.
17）小野田正利：学校への“無理難題要求”の急増と疲弊する学校現場―「保護者対応の現状」に関するアンケート調査をもとに―. 季刊教育法, 147, 16-21, 2005.
18）小野田正利：悲鳴をあげる学校―親の“イチャモン”から“結びあい”へ―, 旬報社, 2006.
19）笹森洋樹・澤田真弓・廣瀬由美子・他：盲・聾・養護学校における乳幼児期の子どもの支援に関する実態調査―センター的機能の充実に向けて―. 発達障害支援グランドデザインの提案, 平成18年度－19年度プロジェクト研究報告書, 国立特別支援教育総合研究所, pp.151-159, 2008.（特教研, C-78）
20）重国直美：一人一人の成長を願って, 共に育つ学級づくり―幼児理解から特別な支援へ向けて―. 第55回全国国公立幼稚園教育研究協議会, 42-43, 2008.
21）鈴木久美子：特別な教育的支援を必要とする子への援助. 第30回東海北陸国公立幼稚園教育研究協議会（静岡大会）大会紀要, 44, 2008.
22）田中康雄：わかってほしい！気になる子, 学研, 2004.

（受稿年月日：2008年８月21日，受理年月日：2008年11月17日）

INVESTIGATIVE REPORT

Survey on awareness of and response to "children of concern" and "parents of concern" by preschool teachers and child-care providers: Considerations in providing organizational support to preschools and child-care centers

KUBOYAMA Shigeki[1], SAITO Yumiko[2], NISHIMAKI Kengo[3], TOUSHIMA Shigeto[4], FUJII Shigeki[5], and TAKIGAWA Kuniyoshi[2]

[1]Department of Policy & Planning, National Institute of Special Needs Education (NISE), Yokosuka, Japan
[2]Department of Teacher Training and Information, National Institute of Special Needs Education (NISE), Yokosuka, Japan
[3]Department of Educational Support, National Institute of Special Needs Education (NISE), Yokosuka, Japan
[4]Kamakura Women's University, Kamakura, Japan
[5]Department of Counseling and Consultation for Persons with Special Needs, National Institute of Special Needs Education (NISE), Yokosuka, Japan

Received August 21, 2008; Accepted November 17, 2008

Abstract: Teachers at preschools and care providers at child-care centers sometimes describe children with some kind of issue in the provision of education and child care as "children of concern." In this paper, data obtained by conducting a questionnaire survey on what constitutes "children of concern" to preschool teachers and child-care providers are presented. A wide variety of responses, ranging from assumed developmental disability to cases of abuse to allergy, were obtained. Issues regarding provision of education and child care, and the actual support currently being provided were also investigated in the survey. Many responses were obtained for the questionnaire items, "behavioral issues of children of concern" and "issues involved in group activities." Regarding the actual support currently being provided, "special attention to individual children/speaking to them" accounted for more than half of the responses. Next, questionnaire items regarding "parents of concern" were given. A wide variety of responses, such as "lack of discipline," "indifference" and "rare or inconsistent response to requests from preschool teachers or child-care providers" were obtained. There was a difference in the trend of responses to all the questionnaire items depending on the respondents' affiliation and age of the children under their care. On the basis of the results of the questionnaire survey, considerations that organizational support providers to preschools and child-care centers should pay attention to were discussed.

Key Words: Special support, Children of concern, Parents of concern, Viewpoints of preschool teachers and child-care providers